

ふるさと歴史館 第40回企画展

むかし ばなし

ほ

石岡の昔話を掘る

― 昔話にみる

人々の祈りと感謝のこころ ―



紙芝居絵『無駄骨弥兵衛さんのはなし』部分

令和7年**4月9日**(水)～**7月6日**(月)

入館無料

開館時間

10:00～16:30

休館日

月曜日(祝日の場合は翌日)

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社1-2-10 石岡小学校敷地内 電話 0299-23-2398

石岡の昔話を掘る

—昔話にみる 人々の祈りと感謝のこころ—

■目次

井関村の大人形	2
人腰地藏のはなし	3
無駄骨弥兵衛さんのはなし	4
稲荷大明神の狐と初太郎さん	5
木比提狐の恩返し	6

■例言

本冊子は、令和7(2025)年4月9日～7月6日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第40回企画展に際して作成したものです。

展示及び本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課(飯塚 信久)が行いました。

本冊子で使用した地図は、国土地理院数値地図25000から部分転用いたしました。

井関村の大人形 いせきむらのおおにんぎょう

あらすじ

井関地区の大人形は、毎年お盆の8月16日(もともとは8月17日)に、それぞれの集落で、麦わらや稲わら、伐りたての杉の葉などで巨大な人形を作り、集落の入口などに供えつけてきました。現在では代田(だいた)集落、長者峰(ちやうじゃみね)集落だけで作られています。以前は古酒(ふっさき)集落、梶和崎(かじわざき)集落、八木(やぎ)集落、三村の御前山(ごぜんやま)集落でも大人形作りをしていました。

江戸時代の天明(てんめい)(1781~)の頃、全国的に「天明の飢饉(ききん)」といわれ、悪天候のために農作物が育たない大凶作(だいきようさく)になりました。さらに悪い病気もはやり、たくさんの人たちが飢えや病気で亡くなりました。井関村にとっても、とても深刻な問題となり、村の代表者が集まり、村の言い伝えで、とても力が強く、疫病神(えきびょうしん)を追い払ったり、作物の恵みをもたらしてくれるというダイダラ坊のお姿を作り、おまつりをするようになりました。井関村の代表者たちはそれぞれの集落で、思い思いのダイダラ坊の人形を作り始めました。六尺以上(約2メートル)の高さの丸太にわらの束を巻き付けた人形や人形全体に杉の葉を挿したり、大人形に刀を差したり槍を持たせたりしました。大人形の顔も木の板に墨で仁王(におう)様や鬼のようなおそろしくこわい顔を描きました。

この大人形は、翌年の8月17日までの1年間、おそろしく、こわい顔をして、雨の日も風の日も集落に入ろうとする悪いモノや悪い病気を寄せつけないよう見張りを続け、村人たちの願いでもある「健康」「繁栄」「豊作」のためにずっと立ち続けてくれています。

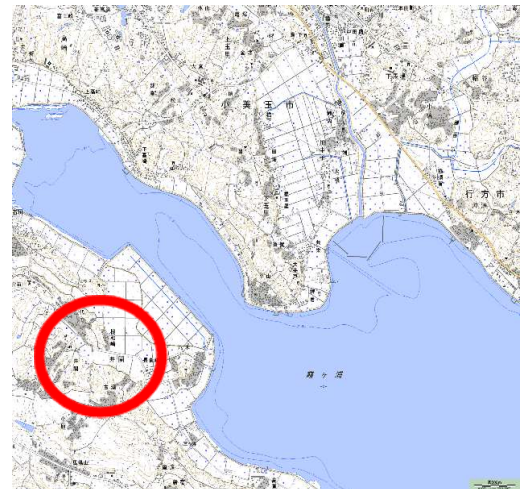
—大人形は力持ちで気持ちは優しく、勇気があり、どんな悪いモノや悪い病気も退治して、この集落を守ってください—

と、どこの集落でも語り伝えられてきました。

『井関村の大人形』の舞台

井関地区は、石岡市の南東に位置している霞ヶ浦に面した風光明媚(ふうこうめいび)な場所にあります。まわりの霞ヶ浦沿いには美しい水田が広がっています。

江戸時代の頃は、井関村周辺の地域は府中藩領や旗本領となっていました。井関村は水戸藩領でした。そのため、他の地域とは異なった文化や風習を少なからず残している地区といえます。その後、明治22(1889)年に、となりの石川村と合併して関川村となり、昭和29(1954)年に石岡市に編入されました。



江戸時代・天明の頃の井関村

江戸時代の天明(1781~)の頃、日本各地で悪天候のために農作物が育たない大凶作になりました。さらに悪い病気もはやり、たくさんの人たちが飢えや病気で亡くなりました。井関村にとっても、深刻な問題になっていました。医学や科学が発達していなかった時代、最後は神仏のお力にすがらしかない...そこで井関村に伝わる『ダイダラ坊伝説』にあやかり、とても力が強く、疫病神を追い払ったり作物の恵みもたらしてくれるダイダラ坊の大人形を作り、村を守っていただこうと考えたのかもしれません。



「ダイダラ坊の足跡」と伝えられている農村公園の池部分▲

人腰地蔵のはなし ひとこしじぞうのはなし

あらすじ

むかしから安産のお地蔵さまとして厚い信仰をうけてきた「安産地蔵尊」が石岡市川又地区にあります。お地蔵さまは「地蔵菩薩(じぞうぼさつ)」といい、この世の人たちを苦しみから助けてくれ、またあの世で苦しんでいる人たちをも助けてくれることで、多くの人々から広く信仰されてきました。

ある日、貧しい農家のお嫁さんが、なかなか出産することができずにいました。額いっぱいにあぶら汗を流しながら、うなるばかりで、そばにいる母親はどうすることもできませんでした。このままでは、母子ともに命があぶないと、しばらく考えていた母親は、袋に入れたお米をこわきにかかえ、地蔵尊に向かいしました。母親は楽に子どもを産めますようお地蔵さまに一心に祈り続けました。

母親は、お地蔵さまにお祈りして安心して家に帰ると、元気な赤ん坊の泣き声がするので、部屋に戻ってみると、嫁のわきには、顔をくしゃくしゃにした玉のような赤ちゃんが寝ていました。母親は、この様子を見て、嫁に微笑みかけ、無事に出産できたのは、お地蔵さまにお祈りしたからだと告げると、嫁は大きくうなずき、「元気がになったら、子どもを連れてお地蔵さまにお礼に行きます。」と、約束をしました。

その後、女性たちの集まりの場、「地蔵講(じぞうこう)」や「子安講(こやすこう)」がつくられました。また毎月24日のお地蔵さまの縁日には、重箱に手料理を詰めて、地蔵尊の境内に集まり、おまつりをするようになりました。

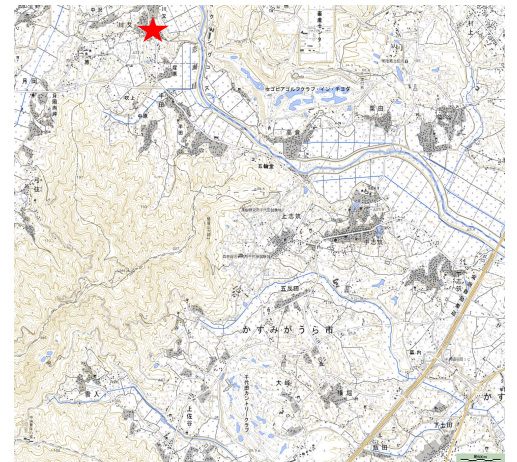
川又地区のお地蔵さまは、産気づいた妊婦が「うーん」と、1回いきばるだけで楽に子どもが産めるということから「人腰(ひとこし)地蔵」と呼ばれるようになったそうです。

こうしたご利益が、近郷近在にも知れわたり、「安産地蔵尊」として、多くの人々の信仰を集めるようになりました。

「人腰地蔵のはなし」の舞台

安産地蔵尊(通称:人腰地蔵尊)がある川又の地名の由来は、大増地区から柿岡地区を経て、川又地区の東側を流れる「恋瀬川」と小幡地区から流れ出た「川又川」が合流する「川俣」からのその名が付けられたといわれています。

地区を通る県道から月岡地区に通じる道の丁字路の高台にある「壽福院跡(じゅふくいんあと)」に安産地蔵尊があります。しかし、昭和初期の県道拡幅工事で、寺院跡や境内のほとんどが消滅してしまいました。



お地蔵さまとは？

人々に「おじぞうさま」と親しまれている「地蔵菩薩(じぞうぼさつ)」は、右手に錫杖(しゃくじょう)、左手に宝珠(ほうじゆ)を持ち、菩薩さまでありながら頭を剃髪(ていはつ)した僧の姿であらわされています。「おじぞうさま」は姿を変えて、この世ばかりではなく、あの世の地獄の世界で苦しんでいる人々をも救ってくれる仏さまとされています。

数ある仏さまの中で、子どもとの結びつきが強いのが「地蔵菩薩」です。そのため、安産と育児の守護仏(しゅごぶつ)として信仰されてきた「子安・子育て地蔵」は、右手に錫杖、左手に子どもを抱く姿であらわされています。

全国各地に中高年の女性が組織する「地蔵講」や「子安講」があり、また、毎月24日に地蔵菩薩の縁日があります。敷物を敷いて、念仏鉦をたたき調子を合わせて経文を唱えます。その後、老若男女から子供たちまで、おじそうさまと一緒に手料理等を食べながら楽しめます。



「川又地区の安産地蔵尊(人腰地蔵)」▲

無駄骨弥兵衛さんのはなし むだぼねやへえさんのはなし

あらすじ

「無駄骨(むだぼね)」とは、「苦労してがんばってやったことが、結局、無駄になってしまう」という意味ですが、決して悪い意味でつかわれるわけではありません。

このお話は、江戸時代の終わりの頃のお話です。石岡の泉町に弥兵衛さんという人がいました。

ある日のこと、弥兵衛さんは、用事があって土浦のほうに出かけることになりました。弥兵衛さんは、土浦に行くために陸前浜街道(りくぜんはまかいどう)(現在の六号国道)を通りました。その頃の陸前浜街道は、田んぼや畑、宿場のほかは、道の両側には松並木しかありませんでした。石岡の南にある幸町の坂道を下り、市川台から土田へと、街道は土浦方面に延びています。稲吉を過ぎ、清水宿あたりにさしかかったときに、松並木の中に、抱き合って嘆き悲しんでいる父親と娘を見つけました。弥兵衛さんはなんとなく不審に思い、父娘に事情をきいたところ、「今日の夕刻までに、借りていたお金を返さないと『打ち首(首を切られてしまう)』になってしまいます...お金を用意するあてもないので、こうして泣いていたのです。」

話を聞いた弥兵衛さんは、お金はわしが用立(ようだ)てるといって、土浦に行くことも忘れて、馬の尻に鞭(むち)を入れて、わが家へと舞い戻りました。

ところが、あいにく、それだけのお金が家にはなく、親類の家や知り合いの家を駆けまわって、やっとのことでお金を集め、ふたたび清水宿の現場へと駆(か)けつけました。

しかし、時すでに遅く、その父娘は処刑された後で、松並木の露と消えていました。「うう、残念だ...」と、つぶやき、齒を食いしばって、無念の涙を流しました。悲しみにくれた弥兵衛さんは、処刑された父娘をねんごろに葬(ほうむ)りました。

しばらくして、この弥兵衛さんの出来事は、あちらこちらに知れ渡りました。それから、町の人たちは弥兵衛さんのことを『無駄骨弥兵衛』と呼ぶようになったということです。

弥兵衛さんは、その後も人が困っていることがあると、黙ってみていることができず、誰にでも手助けをする、とても律儀(りちぎ)な人として、いまなお、町の話題として語り継がれています。

「無駄骨弥兵衛さんのはなし」の舞台

弥兵衛さんが住んでいた泉町名の由来は、その当時、火災がしばしば起こったことから、防火の願いを込めて、水の源泉の「泉」からその名を付けたといわれています。

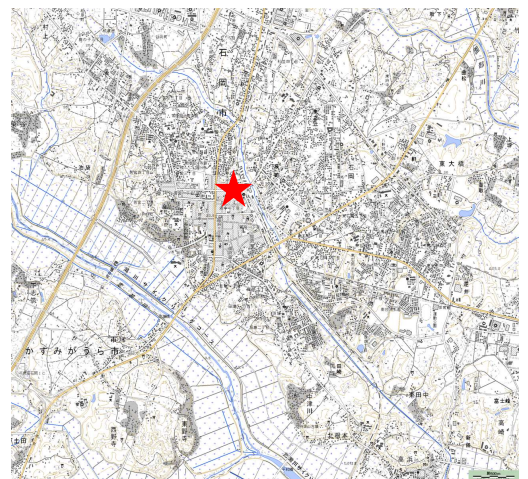
江戸時代から昭和初期まで、東北方面からの玄関口として見付け(見張りをする場所)が設けられ、左右に石垣が残されていました。そこから急な坂道を下ると、山王川を中心とした田んぼ道で、その両側には茶店があり、荷馬車や馬方衆のたまり場になっていました。昭和8(1933)年に泉橋架設のため跡形もなく取り壊されてしまいました。

醸造業、製糸・縫製業、商業のまち石岡のおもかげ

江戸時代中頃から明治時代にかけて、弥兵衛さんが暮らしていた石岡の町は「商業のまち」として賑わいを見せていました。酒造りでは県内最大で、蔵元が18軒もありました。醤油造りでも醤油醸造元だけで20軒もありました。また、明治の中頃からは機械を利用した近代産業の製糸業に力を注ぎました。昭和39(1964)年から41(1966)年には、石岡市内の商店数が最も増えた173軒(小売業86軒)、昭和63(1988)年から平成3(1991)年は、石岡市内の商店での年間売上額がいちばん増加した時期で、石岡が商業のまちとして最も栄えた時代でした。 石岡史蹟保存会『産業1』

石岡市史編纂委員会編『石岡市史 上』P956-P957表 参照

街並みのあちこちに醸造用の煙突と蔵が見える
『いしおか 昭和の肖像』より▶



あらすじ

石岡市小幡にある細内地区の水田の中に「正一位稲荷大明神(しょういちいいなりだいみょうじん)」がまつられています。この神社は、その当時、このあたりでも、冷害や日照りなどの自然災害によって、米や作物の不作が続いているときに、ここに住む農家の人たちが、豊作をお願いするために、京都にある農業の神さまをおまつりしている伏見稲荷大社(ふしみいなりたいしゃ)から神さまをお迎えして建てられた社(やしろ)です。

細内の稲荷大明神では、毎年2月の「初午(はつうま)(稲荷神社のお祭り)」の日には、多くの村の人たちがお参りにやってきて、「今年も豊作でありますように」「家内安全、商売繁盛」とお祈りしてお賽銭(さいせん)とともに赤飯をお供えしました。

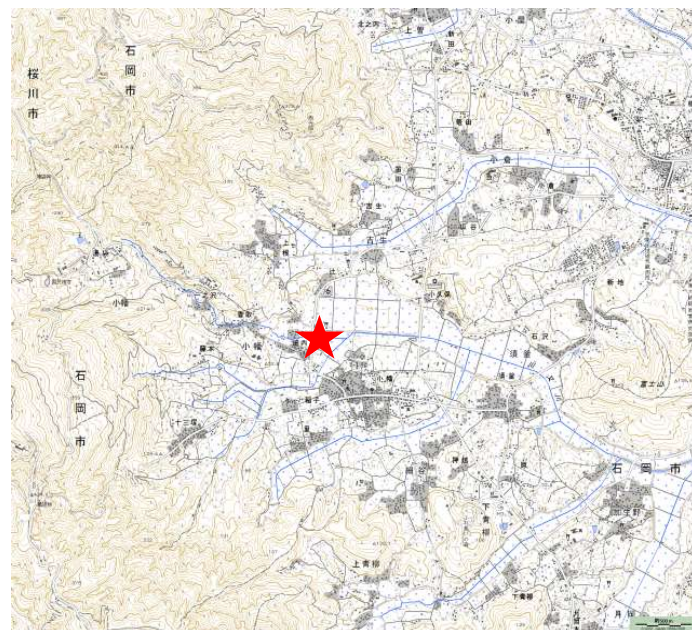
ある日のこと、この村に信心(しんじん)深くお稲荷さまを信仰している初太郎さんが住んでいて、いつものように、稲荷大明神にお賽銭をしてお祈りしましたが、今回はいままでより熱心にお祈りをしていました。

その夜のこと、初太郎さんは近くの細内川に水を汲みに出かけたとき、白い狐が現れて、「峰寺山(みねでらさん)のすそのほうから美しい光が飛んでくるから見てくれ」というので、その方向を見ていると、七つの丸い光が一直線につながって飛んできました。すると丸い光と白い狐は、稲荷大明神の鳥居(とりい)の中に姿を消してしまいました。

家に帰り、深い眠りについた初太郎さんの夢枕(ゆめまくら)に、あの美しい白い狐があらわれて、「あきらめず、苦しくてもがまんして商売を続けることが大事や。」と、お告げをしました。夢から覚めた初太郎さんは、狐のお告げを信じて、毎日仕事に励んでいるうちに、商売もうまくいき、立派な屋敷も蔵も建てることができました。村の人たちは狐を稲荷大明神のお使いと考え、狐を大切にあつかい、稲荷大明神への信仰心を持ち続け、祈りと感謝の気持ちを「赤い鳥居」という形にあらわして、何本もの赤い鳥居を稲荷大明神の社の前に寄進(きしん)していきましました。初太郎さんも稲荷大明神に日々感謝のお祈りをしながら元気に働いていたそうです。

「稲荷大明神の狐と初太郎さん」の舞台

細内という地名は、「削られて細長い場所」というところから名がつけられました。初太郎さんの時代の細内は小幡村の集落の一つでした。小幡村には多くの寺院やお堂、社(やしろ)がありました。このことから当時の村人たちが、いかに多くの神さまや仏さまを信仰していたかをうかがい知ることができます。



◀水田の中に鎮座する細内稲荷神社 遠くには峰寺山が見える

木比提狐の恩返し きびさげきつねのおんがえし

あらすじ

明治時代の終わりの頃、山根(やまね)の園部村(現在の石岡市園部地区)の村人が、息子と一緒に高浜からの帰り道、国分寺のお薬師(やくし)さまのお祭りに立ち寄りました。ふと、村人が目を凝らしてみると、何人かの人たちが、カゴに入れられた二匹の子狐を、見世物小屋(みせものごや)に売る相談をしていました。村人は哀れに思い、その子狐を買い取りました。子狐が入っているカゴを息子に背負わせて、木比提稲荷の杜(もり)まで行き、カゴから子狐を出して逃がしてあげました。

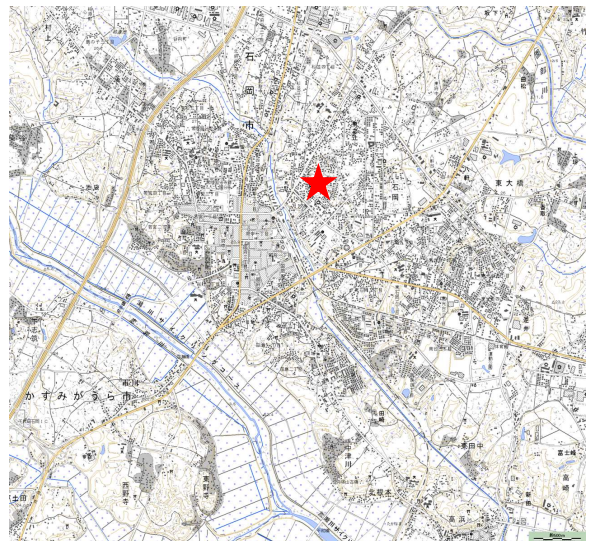
それから数年がたちました。村人は木比提稲荷の近くに用事があり、木比提稲荷の杜を通りかかる時、あの狐たちのことを思い出しました。すると、どこからともなく、二匹の狐があらわれて逆立(さかだ)ちをして消えてしまいました。

時が流れて大正時代となったある夜のこと、村人は夢の中で稲荷大明神(いなりだいみょうじん)からお告げをいただきました。村人はさっそく夢で見た場所まで行き、地面を掘ったところ、「一朱金(いっしゅきん)」が一枚出てきました。その年の秋にもまた、夢で稲荷大明神のお告げがあり、陸稻(おかぼ)の株の間から光った「一朱金」を見つけました。その後も何回もお告げがあり、百枚以上の「一朱金」を見つけることができました。その評判を見聞(みき)きした人たちは、稲荷大明神のご利益に感心して、「稲荷講(いなりこう)(稲荷大明神を信仰(しんこう)する団体)」を組織して、木比提稲荷神社のお祭りの日や、初午(はつうま)の日に、二斗(にと)(30kg)の重ね餅を奉納して参拝をしました。特に、大正6(1917)年から大正12(1923)年頃まで、東京からたくさんの「稲荷講」の人たちが、木比提稲荷神社に参拝に訪れ、大変な賑わいを見せていました。それは笠間稲荷神社をものぐほど多くの人たちの参拝であったといえます。

木比提稲荷神社は、当時の陸前浜街道(りくぜんはまかいどう)から少し離れた場所に鎮座(ちんざ)していましたが、稲荷神社の場所がわかるようにと、街道沿いの参道入り口には『是(これ)よりきびさけいなり道』と、記された道標(みちしるべ)が建てられました。それは現在でも残っています。その道標からも、かつて木比提稲荷神社が大変な賑わいを見せていたことを物語(ものがた)っています。

『木比提狐の恩返し』の舞台－石岡の杉並木と道標－

江戸時代の木比提稲荷神社の近くを石岡の町を通過する陸前浜街道が通っており、泉町の先にあった「一里塚」から「行里川(なめりかわ)」までの約2キロにわたって杉並木が続いていました。街道の両側に沿って立ち並ぶ木々の景観はとても素晴らしいと記録に残されています。残念ながらその杉並木も昭和30(1955)年道路拡張の際に伐採されてしまいました。「一里塚」の手前には『是よりきびさけいなり道』と記された道しるべが現在でも残っています。



◀ 木比提稲荷神社参道の道標

石岡市立ふるさと歴史館第40回企画展

石岡の**昔話を掘る**

—昔話にみる 人々の祈りと感謝のこころ—

令和7年4月9日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195 石岡市柿岡5680番地1

tel:0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016 石岡市総社一丁目2番10号

tel:0299-23-2398